

名古屋わかもの会議と ESD

—若者の声 集約事業から—

Nagoya Youth Conference and ESD Meeting with Communities

三輪昭子 Shoko Miwa, 水野 翔太 Shota Mizuno

概要

愛知学泉大学地域デザイン総合研究所の力を得て 2014 年から 3 年間の期間を利用し、名古屋わかもの会議（水野翔太元代表、創設者、現総合統括）と本学でソーシャルマーケティング、及び公民科教育法担当とする三輪昭子准教授とが共同で研究プロジェクト「ESD を推進する若者の声集約事業」を行った。

名古屋わかもの会議では 2014 年から不定期ではあるが年に数回、愛知県、東海地区を中心に中学生から大学院生という層の若者を集め、「防災」をはじめ「まちづくり」「国際協力」「教育」「観光」などの課題に対し分科会を行い、そのまとめを共有しあってきた。

本稿のテーマの一翼を担っている「ESD」は、「持続可能な開発のための教育」のことである。その概念の中心を担う「持続可能性」は環境問題を意識して使われる傾向はあるが、「名古屋わかもの会議」の設立と継続的な活動に、持続的な「人創り」を意図した重要な意義があり、設立者の想いが込められている。

本稿は実践報告である。研究プロジェクト期間に行った第 3 回、及び第 4 回の名古屋わかもの会議、名古屋グランパスとのイベントについて、その関連する内容を踏まえながらの報告となっている。

キーワード

ESD、社会参画、地域活性、若者会議、人創り、当事者意識

目次

- 1 はじめに
- 2 名古屋わかもの会議
- 3 若者と社会参画
- 4 研究プロジェクト
- 5 ESD と地域貢献
- 6 若者の声は、どこへ行く～終わりに代えて

1 はじめに

国民投票法、すなわち日本国憲法改正の手續きとなる法律が、さまざまな課題を内包しながらも成立し、公布されたのは 2010 年のことだった。投票権者は 18 歳以上の日本国民となっていて、やがては国政選挙の参政権もしかるべき段階を経て 18 歳以上になるとされた。

実際、2015 年 6 月に改正公職選挙法の成立によって選挙権年齢は 20 歳以上から 18 歳以上となった。ここから高等学校における主権者教育への実施が強

く意識されるようになった。

一連の動きを受けて、公民科教育学を基本的な専門としている三輪は、数年前から周囲で特に英国の「シティズンシップ教育」の話題や研究が増えてきたことを受け、いわゆる「投票行動へと向ける有権者のための教育」ではなく、「さまざまな社会的課題や自身の周囲のことに関心をもち、それらを自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく教育」への魅力を知るに至った。

三輪と名古屋わかもの会議との出会いは、2013 年

11月に遡る。旧友の知人から、「面白い活動をしようにしている学生団体がある」という何気ない会話の中から、その若者団体を育てていくことで、地域社会の何かが変わるかもしれないけれど、彼らにはアドバイザーを必要としているというような、そんなことも話した記憶がぼんやりとある。

その「名古屋わかもの会議」の元代表である水野翔太氏は当時大学1年生、名古屋市シンボリック存在のテレビ塔で全国から100名の若者を集め、題して「第1回名古屋わかもの会議」を3月下旬に開催すべく、準備へと駆け出す直前、2014年の新年を越え、ようやく顔合わせが成立。彼のまっすぐな想いと、さまざまなところから学び取ったノウハウを持って、名古屋わかもの会議という学生団体の舵取りをしようとしていた。

水野氏の人柄、学生団体としての未知なる動きに興味を駆られ、同時にESD関連の行事が愛知県、及び岡山県で行われる時期に当たったことに着想を得て、ESD関連の研究プロジェクトを共同で立ち上げ、それが彼らの学生団体としての糧になればいいと考えた。同時に三輪自身も彼らの視点を取り入れることで視野が広がるように思われた。

その研究プロジェクトを、「ESDを推進する若者の声集約事業」と銘打って3年計画で実施することとし、2016年に無事に最終年を迎えることができた。その最終年と水野氏が大学4年生という最終学年を迎えたことを期し、実践報告をまとめることとした。本稿は、水野氏と三輪との協議、また時には三輪のアドバイスを受けつつ水野氏がまとめたものを発表する。以下の章は、水野氏の手による執筆となっている。

2 名古屋わかもの会議

この章では、そもそも「名古屋わかもの会議」がどのようなことを目指しているのか、さらには全国に広がる「わかもの会議」の歴史・特徴を探っていく。

2.1 『名古屋わかもの会議』とは

「名古屋わかもの会議」は、2013年夏に高校生・大学生10名で結成された。コンセプトとして「愛知・名古屋をわかものから盛り上げる」とし、この愛知・名古屋における課題や魅力を知り、考え、発

信することで、持続可能な人創りを展開していくことを目指している。

主な企画としては、不定期（おおよそ1年に2回程度）に全国から中学生～大学院生までの年代100人を集め、開催している「名古屋わかもの会議」や、スポーツという視点から地域の課題や魅力を探るイベント、愛知県や名古屋市の事業の企画・運営などがある。

これらは、あくまでも「キッカケ創り」と位置づけをし、参加者自身が新たな一歩が踏み出せる場となっている。



図1 名古屋わかもの会議開催の様子
(2015年3月23日 藤田周撮影)

2.2 「名古屋わかもの会議」設立に至った理由

私は大学進学を機に、上京をした。その理由には、高校1年生の時に参加したCOP10がある。COP10は生物多様性や環境問題に関する国際会議で、私はそれらに関心は全くなかったが、地元開催だったという単純な動機でNPOや企業・行政の取り組みを市民に向けて発表する市民EXPOに参加した。そこで、真剣に生物多様性や環境問題を考えている大人と出会い、私たちわかものからも環境や地域のこと、社会のことを知り、考えることの重要性を感じた。

その一方、もっと広い視野で物事を学びたいと考え、人と情報が集まる首都東京の大学に進学することに決めた。

東京では、「若者と政治を結びつける」をコンセプトに高校生100人と国会議員が国会で討論するイベントを企画・運営した。

「高校生100人×国会議員」に来る高校生は社会や地域のことに対して問題意識を持っている。つまり「当事者意識」が根付いている人が多かった。そんな中、地元の愛知・名古屋を見たときに、社会の

こと・地域のことを話し合える場がないこと、話せる仲間が少ないこと、そしてそれを聞いてくださる大人の方が少ない現実と直面した。そこからフラットに社会・地域のことを話せる場を創りたいと思った。その思いが現在にも至っている。



図2 「高校生100人×国会議員」の様子
(2015年8月4日僕らの一歩が日本を変える。撮影)

2.3 「わかもの（若者）会議」の歴史

現在、「わかもの（若者）会議」なるものは、全国に約50個、私が確認できていないものを含めるとさらに数は多くなるようなイメージもある。そんな中、そもそも「わかもの（若者）会議」の定義はないのである。学生と限定しているところがあれば、35歳以下を若者と定義していたりと、バラバラなのである。

地域のことを若い人が話し合っている。それが「わかもの（若者）会議」というような認識になっている。そのため、各地にある「わかもの（若者）会議」を束ねる全国組織のようなものもない。私はここにある種問題を感じるのだが、だからこそ各地の「わかもの（若者）会議」に地域色が出ているのも面白いと考えている。

歴史を遡ると、2008年秋田県にある秋田県南NPOセンターが、秋田県を活性化させるために必要なアイデアをピッチ型で出し合う形でスタートしたと言われている。その後、2012年に秋田県若者会議ネットワークとし、横手、大仙、北秋田、上小阿仁（かみこあに）、羽後他3都市へ展開されていった。

そんな中、長野県小布施町で「小布施若者会議」が2012年に始まった。これが現在の「わかもの（若者）会議」なるものが広がった引き金ともなったのである。地域の可能性を2泊3日で徹底的に話し合う姿は多くの人を巻き込み、多くのアクションが生まれた。また、地方創生の一つとして注目された。



図3 小布施若者会議の様子
(2014年11月22日 水野翔太撮影)

2.4 各地に広がった「わかもの（若者）会議」

2012年にスタートした「小布施若者会議」は2泊3日の日程で、これからの地方の可能性を、35歳以下の人たちで徹底的にディスカッションを行うものだった。また、小布施の町を知ってもらうためにフィールドワークを展開したり、フロントランナーと呼ばれる特定の分野で先進的な取り組みをやっている方を講師として招き、インプットの時間も大変濃厚で大切にしていた。

2014年には、「わかもの（若者）会議」が名古屋でスタートし、2015年、札幌、宮崎でもスタートした。札幌は、名古屋と似ておりアイデアピッチ型であったが、宿泊を伴うことで、より議論の質を深めることが出来るようになっていた。また、宮崎ではディスカッションの結果まとめた内容をそのままクラウドファンディングでかけていく形式を採用し、アイデアで終わりではなく、実践を重視してきた。

そして、今年2016年は熊本でも開催。「くまもと若者会議」は、自分自身を見つめ直すような時間になっており、一人ひとりの芯の思いに迫る内容になっていた。



図4 「くまもと若者会議」の様子
(2016年10月22日 水野翔太撮影)

これらをまとめると多くは、その開催地域や地方という大きな枠組みを盛り上げるために求められることを、アイデアピッチ型で展開しているものの、ビジネスに近づけていくもの、人にフォーカスしたものなど多岐に亘っているのが見て取れる。

そんな中、「名古屋わかもの会議」は、アイデアピッチ型の形態を用いている。

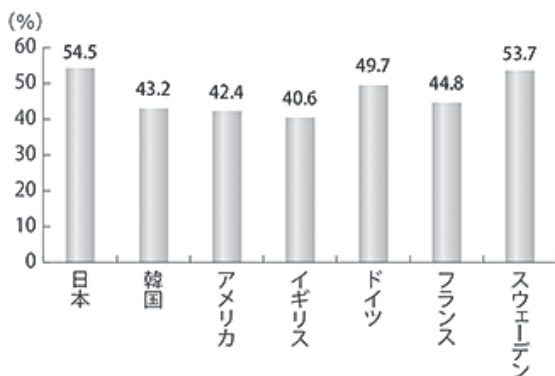
3 若者と社会参画

この章では、若者の社会参画はどのように進んでいるのか、具体的なデータを用いて考えていきたい。

3.1 なにかやりたい人は多い

『平成 26 年版子ども・若者白書』によると、自国のために役立つことをしたいと思っている若者の割合は 54.5%（図 5）と、諸外国に比べて相対的に高いことがわかる。

図表 14 自国のために役立つと思うようなことをしたい



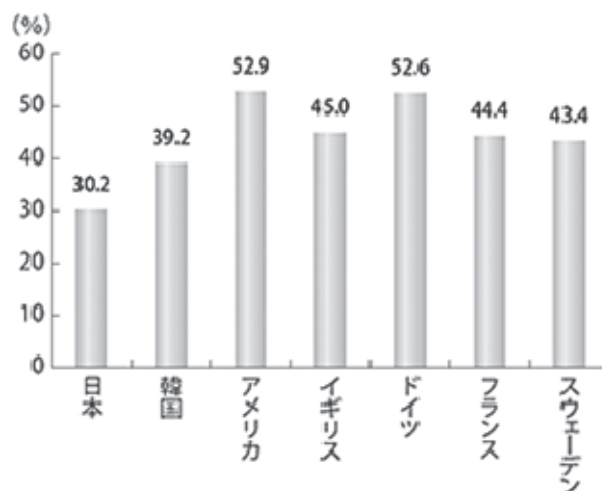
(注)「あなたは、これから述べることについてどう思いますか。」との問いに対し、「自国のために役立つと思うようなことをしたい」に「はい」と回答した者の合計。

図 5 自国のために役に立つことをしたい

(出典：『平成 26 年版子ども・若者白書』)

しかし、社会問題への関与や自身の社会参加によって、社会現象を変えられると考えている日本の若者は諸外国と比べて、相対的に低いことがわかる（図 6）。これらから、日本の若者は、なにかしたい・取り組みたいとは考えているものの、それによって社会が変わる・変えたいと思っている人が少ないことがわかる。

図表 7 社会現象が変えられるかもしれない



(注)「次のような意見について、あなたはどのように考えますか。」との問いに対し、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

図 6 社会現象が変えられるかもしれない

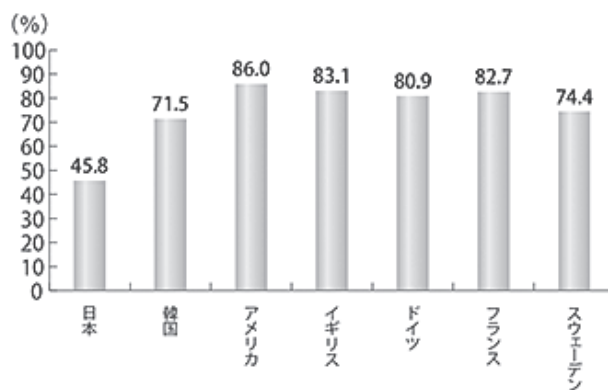
(出典：『平成 26 年版子ども・若者白書』)

3.2 自己肯定感の低い日本の若者

何かしたいが、変化を望んでいないのは、なぜだろうか。変化を望んでいるからこそ、なにかしたいのではないだろうか。その答えは自己肯定感にあると考える。

先に出てきた『平成 26 年版子ども・若者白書』によると、諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低い（図 7）ことがわかる。それも極端に低いのである。

図表 1 自分自身に満足している



(注)「次のことがあなたがあなた自身にどのくらいあてはまりますか。」との問いに対し、「私は、自分自身に満足している」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

図 7 自分自身に満足している

(出典：『平成 26 年版子ども・若者白書』)

ここから何かしたいが、自分に自信がない、自分だからこそできることが少ないと考えてしまい、行動に移せていない若者が多いのではないかと考える。

3.3 投票率から考える「社会参画」

若者の社会参画の欠如は、投票率からも見ることが出来る。

総務省が発表する国政選挙における年代別投票率によると、平成26年に行われた衆議院議員総選挙では、20代が32.58%となっている。実に3人に1人しか選挙に行っていないという状態なのである。30代に目を移してみても、42.09%と半分の人は行っていない。一方、60代は68.28%、50代60.07%となっている。

高齢化が進む日本で、選挙に多く行く高齢者と、選挙に行かない若者を天秤にかけると、やはり政策も高齢者向けのものが多くなるのは自然だろう。

期日前投票や不在者投票などの制度が充実する今、投票率が低いのは、ただ忙しいなどの理由よりも、社会に対して「当事者意識」を持っている若者が少ないと私は考える。

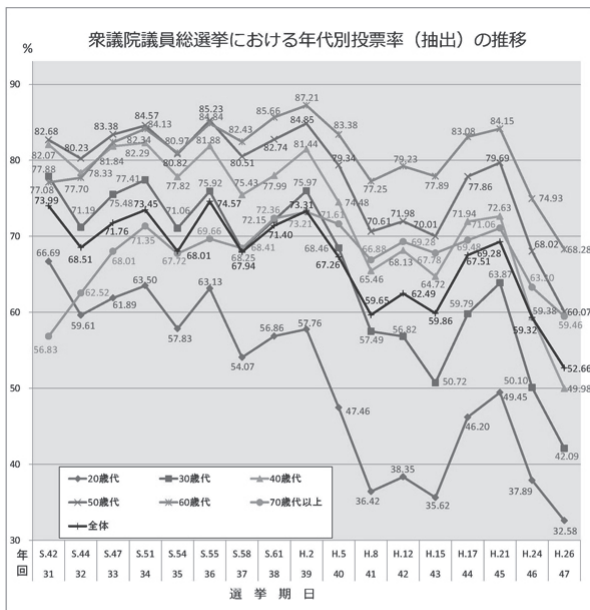
3.4 「動く」若者を増やすために

今の若者に足りないものは、成功体験だと私は考える。私たちは「失われた20年間」と言われるように、決して景気が良いとはいえない時間を過ごしてきた。そのため安定を求めることも多いだろう。そして、経済発展をとげた日本において、地域や社会のことを考えなくても何不自由なく生活していくことができる。ある意味、幸せの飽和状態になっていると私は考える。

そんな中、当事者として地域や社会、政治のことを考えていくには、子どもの頃から社会参画が身近で、当たり前であると認識する必要がある。そして、その延長線上に、大人になっても県・市政やまちづくりに積極的に関わることにつながるのではないだろうか。

4 研究プロジェクト

この章では、三輪昭子准教授と共同で行ってきた研究プロジェクト「ESDを推進する若者の声集約事業」の実施報告と成果を述べる。



年	S.42	S.44	S.47	S.51	S.54	S.55	S.58	S.61	H.2	H.5	H.8	H.12	H.15	H.17	H.21	H.24	H.26
20歳代	66.69	59.61	61.89	63.50	57.83	63.13	54.07	56.86	57.76	47.46	36.42	38.35	35.62	50.72	49.45	37.89	32.58
30歳代	77.88	77.70	71.19	75.48	73.45	71.06	74.57	72.36	73.31	68.46	65.46	68.13	67.76	62.25	63.87	63.10	60.07
40歳代	82.07	80.23	83.38	84.57	82.34	80.97	81.88	82.43	82.74	81.44	85.66	84.85	83.38	79.23	77.89	78.69	74.93
50歳代	82.68	80.23	83.38	84.57	80.82	85.23	80.51	82.74	84.85	79.34	70.61	71.98	70.01	77.86	79.69	68.02	60.07
60歳代	77.08	77.70	82.34	84.13	80.97	84.84	82.43	85.66	87.21	83.38	77.25	79.23	77.89	83.08	84.15	74.93	68.28
70歳代以上	56.83	62.52	68.01	71.35	67.72	69.66	68.41	72.36	73.31	71.6	66.88	69.28	67.78	69.48	71.06	63.30	59.46
全体	73.99	68.51	71.76	73.45	68.01	74.57	71.40	73.31	71.40	67.26	59.65	62.49	59.86	67.51	69.28	62.66	52.66

※① この表のうち、年代別の投票率は、全国の投票区から、回ごとに144~188投票区を抽出し調査したものです。

※② 第31回の60歳代の投票率は60歳~70歳の値に、70歳以上の投票率は71歳以上の値となっています。

図8 衆議院議員総選挙における年代別投票率

(出典：総務省国政選挙における年代別投票率)

4.1 「第3回名古屋わかもの会議」

2015年3月に「第3回名古屋わかもの会議」を名古屋港湾会館で開催した。テーマは「愛知・名古屋の新たな魅力を発信しよう」とし、防災・観光・国際・ビジネス・交通・まちづくり・環境の7つのグループに分かれ、全国から集まった若者100人でディスカッションやフィールドワークを行った。



図9 「第3回名古屋わかもの会議」の様子
(2015年3月23日 水野翔太撮影)

午前開催したフィールドワークは「知る」をテーマに名古屋港を船で周り、港が果たしている役割

やどのような企業があるのか、どんな活用がされているのか、参加者自身の目で見て学んだ。また、参加者同士のことを知るためにも、アイスブレイクを実施。なぜ、名古屋わかもの会議に来ようと思ったのか、今日なにを実現したいのかなどを自分と向き合い、他の参加者に共有する時間を設けた。この時間を設けたことで、お互いの関係もクリアになり、その後のディスカッションも円滑に進んだ。

昼食をはさみ、午後からはディスカッション。7個の分科会を10チームに分け、約2時間半みっちりチームごとに「愛知・名古屋の新たな魅力を発信」するために必要なこと、求められることを話し合った。

結果として、「防災」分科会からは、港で地震が起きたことを想定して避難所体験をしてみようという案が出たり、総取扱貨物量日本一であることを活かし、日本のハブ港として、さらにビジネスを展開していこう、もっと外国の人を受け入れられる体制を整えていこうという案などが発表された。一見、普通な案に見えるが、これらは綿密にデータを駆使した上での発表であったため、説得力や名古屋港の課題を知ることが出来た。

「第3回名古屋わかもの会議」には、愛知県外からの参加者も多くいた。その一人は、「横浜や神戸は港をうまく利用して、人々が憧れるような場にしてきた。名古屋港はなにが足りないのか」など、愛知県に住んでいる人があまり考えなかった・気づかなかった点を指摘することも多々あり、それが会に深みを与えていた。「名古屋わかもの会議」と「名古屋」にこだわりながらも全国・全世界の誰もが参加できるようになっているのは、このような外の人の視点から気づくことが多々あるためである。

また、窓口となっていただいた「名古屋港管理組合」の方は、「そもそも名古屋港に来てくれる若者はいない。」と話しており、開催後も名古屋港を訪れ継続的な関係性を築いている。

4.2 「第4回名古屋わかもの会議」

2015年8月に「第4回名古屋わかもの会議」を開催。会場は航空自衛隊小牧基地とした。テーマは『僕らが創る愛知・名古屋～現場と若者の化学反応～』とし、全国から、そして初めて海を渡りアメリカからと約80人の参加があった。

始めに、各分野にて先進的な取り組みをされている方からお話を聞く場を設定。「環境」分科会では、

愛知県犬山市などで太陽光発電の普及を進める「おひさま進歩エネルギー」執行役員の谷口彰さんがエネルギーの現状について説明。参加者は、これらの話題を受けて、環境を遠い発電所の話ではなく「身の回りのこと」だと考え、結果として自分たちが使っている電力がどこから来るのかを「電力マップ」で示そうという案を出した。

「食」の分科会ゲストは、三重県で自然派農法に取り組む「八風農園」の寺園風(ふう)さん。20代で農園を経営、100種類近くの野菜のほか、地ビールまでつくって名古屋で「なやばし夜イチ」というイベントを開いて販売するなど、食の世界に「新風」を巻き起こそうとする寺園さんの挑戦に、同世代の参加者は興味津々。「食べるとは何か」という原点に戻って考え、シンプルな「おにぎり」を「愛知のお米」と「名古屋めし」のコラボでつくってみたらと提案した。

また、この「第4回名古屋わかもの会議」では、今まで取り組んだことのなかったことにも展開を試みた。以前までは、話し合われた内容の発表を1チームずつ前に出て、プレゼンテーションする形態であったが、今回はポスターセッションのような形で発表を聞く側がぐるぐる回るという形態にした。

同じ発表を何度もしないといけない。周りでも同様にプレゼンテーションをやっているため声が届きにくかったという意見もあったが、運営上円滑に時間を区切ることが出来た。



図10 「第4回名古屋わかもの会議」の様子
(2015年8月29日 水野翔太撮影)

その他、地元企業・こども・高齢者・環境・観光・防災の分科会に分かれ、ディスカッション。防災食を食べながら学ぶ「B(防災の頭文字Bより)1グランプリ」を開催しようなどが発表された。

これらの案は、参加者同士で共有するのみではなく、知事・市長、行政、企業の方などに審査員として来場いただき、評価していただくことによって、一層実現に向けて一步を踏み出せるような時間になっている。

このように、回を重ねることで課題も少なくなり、洗練されたものが形として参加者に提供することができるようになった。一方、固定化することも多くなってしまい、会の停滞が否めない状態となっているのも事実である。

4.3 「名古屋わかもの会議×名古屋グランパス」

「第3回名古屋わかもの会議」や「第4回名古屋わかもの会議」を通して、私は参加する層が偏ってきたと感じていた。やはり、防災や観光という分科会は、誰もが考えられる話題ではあるものの、ある程度問題意識を持ち、自分の意見を言える人が「名古屋わかもの会議」に参加する傾向があった。

そこでもっとフラットな切り口で社会のこと・地域のことを捉えられないか考え、「スポーツ」を取り上げることにした。スポーツは誰もが楽しめるものであり、地域と密接につながっているべき存在でもある。しかし、現状、スポーツはただやるもの・観るものとして捉えられ、地域における役割を見出すことができていなかった。

また、ディスカッションして発表された案を言いつけなしで終わるのではなく、実現まで結び付けていく必要性が大いにある。しかし、不定期に開催する「名古屋わかもの会議」では、その後の動きが展開されることは数個あるものの、多くは発表されたままになっている。そこでプロスポーツクラブとタッグを組むことで、話し合われたことを実際に一緒に形にしていく柔軟性もあるのではないかと考え、サッカーJ1（当時）名古屋グランパスと連携を強化してきた。

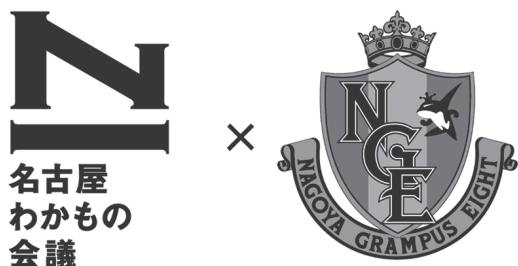


図 11 名古屋わかもの会議×名古屋グランパス
（出展：名古屋グランパス公式ホームページ）

グランパスにも課題が山積みであった。そもそもグランパスなどの「プロスポーツ」は、ファンはもちろん、地元の自治体、住民にとって何らかの価値を創造し、そこから収益を得るという自立した存在でなければならないと一般的には言われている。しかし、グランパスはトヨタ自動車という大きな後ろ盾があるため、資金源が大変豊富ではあり、クラブの提供価値は、試合での勝利のみだと考えてしまっている。そのため地域社会における存在意識は大変低く、試合の平均観戦者数もチームが強いときには多く、弱いときには少ないという「気まぐれ的な」構図が出来上がってしまっているのだ。また、Jリーグスタジアム観戦者調査 2015 サマリーレポートによると、グランパスの試合観戦理由は、「対戦相手が魅力的だから(1位)」「スケジュールの都合(3位)」などと、スタジアムに足を運ぶ多くの人が「グランパスというクラブ自体以外に価値を感じている」ことがわかる。さらには、「クラブのファンであることは、とても重要である。」などの3つの質問を得点化したチームアイデンティフィケーションは、J1（当時）ではグランパスが最下位。J2を含めてもワースト6位となっている。これらの調査結果から、今年のグランパスのテーマが「愛されたい宣言」となっているのも、納得がいく。

そんな考え・キッカケ・現状から、今年の9月8日グランパスの本拠地パロマ瑞穂スタジアムにて、学生50人を集め、イベントを開催した。テーマとしては、「スタジアムをただ、試合をやるだけの場ではなく、常に人が行き交う空間にするためにはなにが必要か」とし、公共施設の新たな活用法を話し合った。

その際出た提案を列記する。そこにはハード面からの提案やスタジアムの活用に関するソフト面からの提案があった。

(1) ハード面

- ・スタジアムの地下にショッピングモールを作り、休日もゆっくり過ごせる憩いの場として活用したい。
- ・高齢者住居や子どもが過ごせる場をスタジアムに併設することで、様々な交流を生み出したい。

(2) ソフト面

- ・スタジアムを使ってお見合いパーティーをしたい。
- ・名古屋めしをもっと発信できる催しを開きたい。
- ・デートでも使いたい
- ・いざとなったら避難所として活用できるようにしたい。



図 12 名古屋グランパスとのイベントの様子
(2016年9月8日 水野翔太撮影)



図 13 「岐阜わかもの会議」の様子
(2015年6月21日 岐阜わかもの会議撮影)

このように「スポーツ」という柔らかい視点で物事を捉えることで、より自分事として考えてくれる参加者が増えたとともに、地域の課題や魅力発信にもスポーツが大いに関わっていることを発信できる良い機会になった。

現在、ここで話し合われたことをグランパス側と調整し、来シーズン以降、一つでも形にしていくことを目指している。

4.4 「名古屋わかもの会議」から動き始めたこと

不定期に100人規模で開催している「名古屋わかもの会議」を今まで5回開催し、成果として動き始めていることがある。

一つ目に、「岐阜わかもの会議」である。「名古屋わかもの会議」に参加していた岐阜の参加者が自分自身の地元岐阜でも同じような場を創りたいと考え始めたものである。

「岐阜わかもの会議」は20~30人の規模ではあるが、年に3、4回開催し、密な関係づくりを展開している。その成果もあってか、実際に商品開発などにも到達している。私たちもここから学ぶことは多々あるとともに、わかもの会議が全国的にも展開されているにも関わらずネットワーク化できていない現状からも連携を強めていきたいと考えている。

他にも、女子高生のみで集まって政治をフラットに語り合う場や高校生視点で創る名古屋の観光マップ作製などが動いてきた。

4.5 今後、果たすべき役割

「名古屋わかもの会議」が今後、何を見据え、どんな役割を果たしていくべきなのか。私は2つあると考えている。

1つ目は、継続である。私たち若者の声を継続発信すること、一緒にここ愛知・名古屋を、そして社会や政治のことを自分事として考えてもらうには、続けていくことが大いに求められる。「名古屋わかもの会議」は企画から運営まで高校生・大学生の学生で取り組んでいる。この形態を含め、より継続的に発信できる体制、周りの方や行政の方などと連携を取れる体制を強固なものにしていくべきだと考えている。また、参加する学生にとっても、「名古屋わかもの会議」に来ることが一つの目標、ここから新たなキッカケや一步を踏み出せるような土壌づくりを時間をかけてでも確かなものにしていくべきだと考えている。

2つ目は、形にすることである。声をあげることは誰でも出来る。しかし、その言ったことをどれだけ形にしていくのか、形にできるのか。そこに大きな分岐点がある。「名古屋わかもの会議」に参加する方は、学内外で何かしらのテーマで活動している若者が多い。そのため、「名古屋わかもの会議」で発表したことを実現していく熱意は低く、言いつばなしで終わってしまっている。しかし、実現を軸に社会に意義のある物、影響を少なながらも及ぼせるものを生み出せるよう、今後も活動を展開していきたいと考えるとともに、大いにここに私たちの役割が眠っていると考えている。

5 ESD と地域貢献

「名古屋わかもの会議」はESDという視点で社会・地域を捉えている。実際、視野を広めることで活動の幅も広がった。

5.1 そもそもESDとは

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳される。ESDでは、環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な課題を自らの問題として捉え、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習や活動のことである。つまり、ESDとは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育のことである。

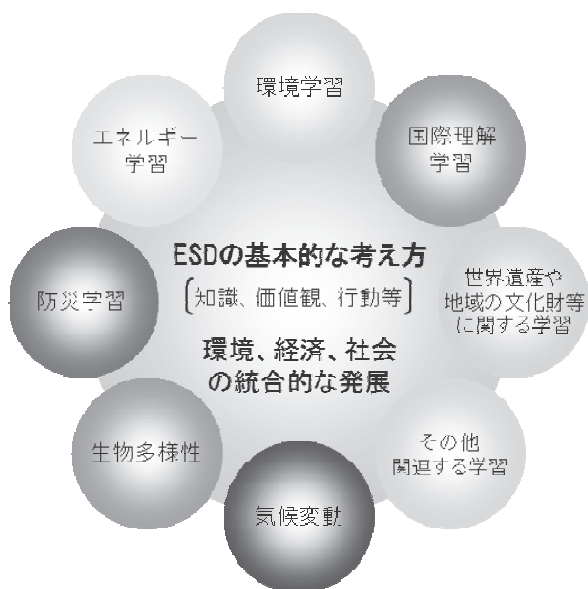


図14 ESDの考え方

(出典：文部科学省ホームページ)

5.2 「名古屋わかもの会議」が取り組むESD

「防災」という観点では、愛知県の消防団啓発事業の企画・運営を担当。大学生の消防団への参画が下がっている現状から、消防団の魅力や重要性を発信してきた。この事業から防災は、地域コミュニティや環境、教育などにも深く関係性があることを確認した。

「環境」や「まちづくり」という視点でも、「名古屋わかもの会議」は愛知県や名古屋市などの事業に参画。そこから「環境」「まちづくり」も経済や金融など様々な分野と関わっていることを実感した。



図15 愛知県の環境啓発イベントに出演
(2015年11月13日 主催者撮影)

このようになにか物事を捉える時には、一つの物事だけで捉えるのではなく、包括的に物事を捉える必要性、そしてそこに問題解決や本質が隠れていることを学んだ。

6 若者の声は、どこへ行く～終わりに代えて

若者の社会参画は二極化している。問題意識を持ち、声をあげる人。動く動かないのではなく、社会や地域のことに関心がない人。この差は歴然である。

私たちは、幸せなことに何不自由ない生活ができています。社会に関わらなくても、政治に関わらなくても生活ができるかもしれない。しかし、それらは将来、私たちに降りかかってくることもある。

なにも考えなくても生活ができる。そんなある意味「不幸せ」な今の状態から、何気ない毎日が社会問題や政治につながっていることを身近に、そして自分事として捉えてもらえるよう、継続して発信していくべきだと考える。そして、若者の存在価値がさらに認められるよう、声を届けるだけではなく、実際に社会に良い影響をもたらす形あるものを自ら実行していくべきだと考える。

引用文献

- ・平成26年版 子ども・若者白書
- ・総務省 国政選挙における年代別投票率について
- ・名古屋港管理組合「データで見る名古屋港」
- ・中日新聞加環境情報誌 Risa「水野翔太の未来にカケル【第

「地域社会デザイン研究」第5号（2017）

7回】会議で光る僕らのパワー」

- ・Jリーグスタジアム観戦者調査 2015 サマリーレポート
- ・THE HUFFINGTON POST 日本版 「グランパスが今後、目指すべきこと」
- ・文部科学省ホームページ

（原稿受理年月日 2016年12月5日）